

まも無い空虚な毎日でした。死人をむしろツトに包んで荒縄でしばり、棒につきさして共同墓地へ担いでいく葬式の列に次から次へと合い、手向けるお線香もなく、ただ手を合わせるばかりです。そのうちに、引揚げ開始の話がありました。デマに終わり、密航船で二十八度線を突破しようという話があり、同志を集めて、その資金稼ぎに、私も煉炭づくりをし、今晚決行しようと思にまぎれてボートに乗りこむところを発見され、男は全部連行され、一晚中留置場に入れられ翌朝「こんな考えをおこさず今一度許すから朝鮮のために働け」と説諭され、放免されました。いったん決心した以上、これで止まる気持ちはありません。その晩、再び命のはしくない者ばかりで決行しようと思。幸か不幸か、雨がジャンジャン降る中をボートで命からがら三十八度線を突破することができました。アメリカカ占領地に着いてからは、ひじょうに待遇もよく、一週間後の昭和二十一年六月ぶじ祖国へ帰ることができました。主人は、三十五年四月に、世を去りました。

平和で強い国であって欲しい

福岡県 有満昌子

明治三年糸島郡前原町に生まれた父は四十六歳の三月二十日下関港より翌二十一日朝鮮京城に到着、総督府の警察官講習所に入所し、卒業後、海州市の巡查を拝命、昭和五年、小富士村の水崎コヒナと結婚致しました。今になって思えば、忘れもしません昭和二十年の八月十五日の恨みの日から四、五日たって、父が事務所の引継ぎだといってそのまま帰っては来ませんでした。後でわかったことは、シベリアに送られひどい仕事をさせられ、伝染病の人達と同じ部屋に寝せられ、食べる物もろくろく貰えず、水、水、と言って死んでいったと聞きました。それは悲惨なものだったと聞かされました。そんな話を聞きたびに思いつくのは三十八度線越えのときのことです。

五歳の妹の手を引いて行く母を見失うまいと懸命に行

く道はでこぼこの山坂道、前にも後にも三十八度線を渡る人々が続いたり切れたりしていました。小さな子供が親にはぐれ泣きつかれて草の上に眠りこけている。向こうの草むらの中に女の子の亡がらが見える。だが誰もふり向こうともせずに一步一步足を引きづって歩く。十三歳になっていた私は身体の丈夫な子供ではあったが、持参した物も食物も捨てたり食べてしまったあとは何もない身一つでした。ひもじさと長旅のつかれに、そこに座り込んで母のことも妹のことも忘れてしまい眠ってしまっておりました。

ふと何かに当たったやうな気がして見ると、床の上に寝かされていて、見知らぬ人が私の顔を上から見下していました。目を開けてよく見ると、上の顔は笑って言いました。お腹がへったよ。お母ちゃんひもじいよ。「フン」と言っておいしそうなトウモロコシを手に持たせてくれました。元気が出たら、私が川を渡って連れて行ってやるよ。私の妹になって、黙ってついておいで。私は黙ったまま、うなづいてトウモロコシを一生懸命かじりました。その人は朝鮮の人でやさしい顔をした小父

さんでした。三十八度線は山こえ谷こえして渡らねばならぬ難所といわれるところです。

そこをその初めて逢ったその人は私を背おったり手を引いてくれて洗心遼に行ったら、きつとお母さんに逢えると言って連れて行ってくれたのです。泣いてお礼を言ふ母に手を振りながら、元気で日本に帰りなさいと言いながら帰って行かれました。

その頃はもう十二月にはいっていました。寒くて妹は凍傷のため、痛い痛いと言います。母と私でハート手に息を吹きかけては妹の手を暖めてやった日も遠い遠い昔になりました。今あの方はどうしておいでのなるかと時々思い出し、背中ぬくもりを、暖かだったとしみじみ思っております。

国は強くなければいけないと思います。今国外に生計を立てながら暮らしている人々がたくさんいると聞いております。その人達のためにも、日本の国は平和で強くなければいけないと思います。